
My Sweet Beast

天音由羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My Sweet Beast

【Zコード】

N7174Z

【作者名】

天音由羽

【あらすじ】

新解釈「美女と野獣」です。

実父と継母、そして二人の義姉妹と暮らしていたリリー。ある日街へ仕事に行つた父の帰りが遅いことを心配し、街を出ようとする。

その時、一通の手紙が。

「父親の命は預かっている。無事に返して欲しければ娘を寄越せ」

リリーは父を助けるため、単身野獣の城に乗り込むのだが…。

紳士で上品な心優しき野獣と、明るく氣立てのいいリリーの恋物語。
ほのぼのハッピーエンド予定です。

My Sweet Beast

鬱蒼と生い茂る森の中。

一筋の光も差し込まず、足元は常にじめじめとした湿氣でぬかるんでいる。

頭上には青黒い葉が覆いかぶさつてきて、木々の鳶が蜘蛛の巣のように絡み合つてゐる。

フクロウの低い鳴き声が絶えず響き渡り、時折野生の狼と思われる唸り声が微かに聞こえる。

葉擦れの音はなにやら幽霊の囁き声のように聞こえて、ゾクリと身震いしてしまう。

どうして私が。

なんてことは分かつてゐる。

何より大切な父は、私の母を亡くしてからしばらくして、どこで見つけてきたのかド派手な極楽鳥みたいな繼母と再婚した。

繼母にはこれまた似たような装飾に身を包んだ、九官鳥（つまりおしゃべりで頭が軽いこと）。つていうと九官鳥に失礼ね）みたいな二人の娘がいて。

私には一度に面倒臭い家族が増えた。

その三人は大きな街まで仕事の交渉に出向いた父にたんまりお土産をねだり、家では私を召使替わりに顎でこき使い、好き勝手に過ごしていた。

あれだけねだられれば値段も相当なはずだ。

父は私にも土産に何が欲しいか聞いてくれたけど、お土産なんていらなかつた。

「お父さんが無事に帰つてきてくれればいいわ

そう言つてこれ以上継母たちが父に何かをねだる前に、さつさと出かけるよう促した。

その父が帰宅予定より一週間を過ぎても戻らない。

何の連絡もないまま帰つてこないなんておかしい。

どうしてこんなに帰りが遅いのか、手がかりを求めて街から帰り付いた人たちに手当たりしだい聞いて回つたけれど、結局何も分からなかつた。

こうなつたらしようがない。

生まれた頃から一緒に暮らしている愛馬にまたがつて、自ら父を探しに行こうと街を出ようとしたのだけれど。

出かけようとしていた私を見つけて、慌てた郵便屋さんが呼び止めてくれた。

そして一通の差出人のない手紙を受け取る。

開いてみれば、そこに書かれていたのは

「父親の命は預かっている。無事に返して欲しければ娘を寄越せ」

いかにも悪党な文章でそんなことが書かれていた。

継母たちの反応は推して知るべし。

「お母様！－！とつても怖いわあ！」

「どうしちゃつたのかしらお父様！－！何をやらかしたの！？」

「まったく困ったものねえ。大丈夫よ、私の可愛い娘たち。リリー、あなたが行つてらっしゃいな」

「…」

いつも分かりやすいといつそ清々しい。

無論あなたたちに言われなくても行くつもりでした。

と、喉まででかかつた言葉を無理やり飲み込んで、私は結局また愛馬にまたがつて街を出ることにした。

最初に手紙を読んだ時には書かれていなかつたはずの地図が、森に入った頃突然浮かび上がつたのにはビックリだ。
どにへいくにせよ、この森を抜けなければいけなかつたから、とりあえず進もうとした矢先のことだつたのだけれど、どうも解せない。

地図によれば森には幾筋か道があるらしいのだ。

素直に従つていいくと、確かにあつた。

一度も通つたことのない…というか、今まで見たこともない道だつたけど。

こんなところに道なんてあつたのね。

なんて呑気に思えたのは最初だけだつた。

地図通りに一步踏み出すと、急に愛馬が怯え出してそれ以上先へ進めなくなつてしまつたのだ。

仕方なし馬を降りて、自宅へ戻るよつに押し返してやり、私は一人歩き出したといつわけ。

動物の本能つて素晴らしい。

あの子にはこの森がどんな場所なのか、察することができたんだから。

こんな不気味なところだつて分かつてたら、私だつてもつと準備万端にして旅立つたのに。

後悔してももう遅い。

頼りにできるのは手元にある地図一枚だけ。

それならば、あとはここを一刻も早く抜け出さなければ。
ぬかるむ地面をしつかり踏みしめ、足早に歩く。

いろんな声や音が聞こえるけれどそれら全てを聞こえないふりし

て通り抜けていく。

服が無数の細い枝に引っかかり、どうしても数力所破けてしまつたけれど、そんなこと気にしていられない。

最後は走る勢いで森を駆け抜けた。

暗くて深い森は、急にぱつと開けた。

顔を上げるとそこには聳えるように建てられた大きな門。延々続いている白い外壁には様々な模様が複雑に彫刻されている。おどろおどろしき悪魔が掘られているのは、ここのは主の趣味なのだろうか。

なんて趣味の悪い。

思わず顔を顰めてから、おそらくこの向こうに父がいるのだと、覚悟して鉄の扉を押し開けた。

これまた不気味さを煽る鉄同士の擦れるギィといつ音が辺にこだまする。

「失礼します…」

一応声をかけてみる。

微かに聞こえる小さな足音。

…何人かいららしい。

でも人の足音とは何かが違う。

そう思っていたら、小さな幾つかの影が目の前に躍り出た。え。

「お待ち申し上げておりました。さあ、どうぞ」

丁寧に奥を指し示されて、恭しくお辞儀され、人形？

田の前で喋ったのは男の子のビスクドールだ。
傍らには女の子のビスクドール。

なぜ？

私、もしかして夢を見る？

森の中が怖すぎて気絶したのかしら？
ぎゅっと頬をつねつてみれば

「痛い」

つてことはこれは現実なんだわ。

現実なのに、なぜ人形が？

そう問い合わせたって、答えはどこにもない。
キツネかタヌキにバカされてるのかしら。
でも。

もしそうなら、化かし合いで勝てばいいだけのこと。
思い直して、私は促された奥の方へ足を踏み出すのだった。

一休のビスクドールは器用に歩いて城内を案内してくれる。
森と同じくらい、いえ、それ以上に暗い廊下は足音がやたらと響く。

両側の壁沿いにブリキでできた鎧が飾られていて、手にされた槍が鋭い鋒を鈍く光らせている。

天井には天使…ではなく蝙蝠羽の悪魔が悪どい顔で飛び回る天井画。

壁に飾られた彫刻も幼い頃読んだ本の挿絵に出てきたゴブリンだ。
なんて悪趣味。

本日一度目の感想に、思わずまた顔を顰めてしまった。
そして城をぐるりと見回しながら歩いていくつつか、どうやら
地下の牢屋らしき場所にたどり着いたようだ。

口ウソクがある場所を照らしてくれる。
ぐらりと影がゆれた。

「お父さん?」

「まさか…リリーか!…?」

「ちょ、お父さん!…どうしてこんなところに…」
しばらくぶりの再会に手と手を取り合って、鉄格子越しに顔を合
わせて喜んだのも束の間。

ぬらりと背後に気配を感じた。

大きな影に覆われて、辺りが一瞬で暗くなる。

異様な気配だった。

振り向くのも躊躇わて、体が硬直する。

「…父親を取り戻しに来たか」

低く地を這うような声。

吐息は獣。

漠然とした恐怖に包まれる。

ぐつと瞳を閉じて、声の主の方へ向き直った。

人形が喋つてここまで案内してくれた。

見たこともない道を通つてきたし、第一あの手紙の文章。
門の彫刻に廊下の天井画、壁の彫刻。
もう何が起こつてもおかしくない。
覚悟して、瞼を押し上げる。

「・・・・・・・・・・・・・・

嘘…でしょう…。

目を限界まで見開いていたと思う。
呼吸の仕方まで忘れていた。

驚愕。

全身を覆つているであろう「ライオン」の様なたてがみに、口からち
らりと見える鋭い牙。

どんなものも切り裂いてしまいそうな爪に、大きな獣の手。
荒野を素早く駆け抜けていそうな逞しい脚。

暗闇でも輝きを放つ力強い碧眼。

視線だけで人を殺せそうだ。

事実、今の私は彼に捕食される寸前だ。

目の前の相手を見た瞬間に、自分の命はすぐに潰えるだろうと思えた。

あの噂は本当だったのだ。

幼い頃から街でまことしやかに語られていた「野獸」の昔話。人を攫つては喰らい、悪魔のように血に飢えている、と。どうして父はこんな恐ろしい野獸の住処に入り込んでしまったのか。

考えたところでもう遅い。

私も喰われるのだろう。

そう、全てを悟つて諦めようとした時だった。

ぐつと野獸が近づき、いつの間にか床に座り込んでいた私の腕をとつて、立ち上がらせる。

え？

それから父を閉じ込めていた牢の扉をすんなり開き

「これで契約は成立だ。お前を解放しよう」

静かな声で告げた。

囚われの身のはずだった父は、乱暴に扱われることもなく、ビニからともなく現れた荷車にドサと載せられる。

「リリーーー！」

悲壮な声がして、ハツと我に帰れば父が目の前から遠ざかるところだ。

「お父さんーー！」

叫ぶ私の体を大きな獸の手がつかんで引き止めていた。すぐに父の姿は暗闇に消えて見えなくなる。

助かったの？

これで本当に父は助かったの？

たまらず野獸に縋り付いて、獸の顔を見上げた。

全身の力が抜けて、足で体を支えられない。
でも私の体は床に打ち付けられずに済んでいた。
野獣だ。

逞しい獣の腕が、私の腰を支えてくれている。

「なぜ？」

全ての問いは言葉にならずに消えていく。

けれど。

「そなたの父は無事に送り届けられる。安心するがいい」

「え？」

見抜かれた？

それとも、声に出していた？

「部屋はこちらだ。歩けるか？」

「へ、や？」

「ここに寝たくないだろ？」

「…私、父の代わりに…」

牢に閉じ込められるんじゃないの？

あなたに食べられるのを、ここで待つんじゃないの？

どうして部屋なんて？

心の中の問いかけを、彼はどう読み取ったのだろう。

一瞬だけ怪訝な顔をしたかと思つたら

「言つておぐが、私はそなたを喰らつたりしない」

なんて言つた。

続く

どこまで歩いても、憂鬱さを増す廊下は重く薄暗い。やたらと響くのは私の足音と、野獸の足が爪で床をひつかく音だけ。

布で覆われているビスクドールの足は、ぽふぽふと小さな音を立てるのみ。

無言の重圧に押しつぶされてしまうかと思ったけれど、意外なことに、野獸は静かに話しかけてくれていた。

「部屋には一通り必要なものをそろえてある。足りないものがあればいつでもヴィスコンティに言つといい

「ヴィ、ヴィスコンティ？」

「男の人形の方だ。身支度は女人の形の、シシリエンヌが整えてくれるだろ？」

野獸は丸くて大きな指で（ほぼ手で）人形を指し、ビスクドールの紹介をしてくれた。

視線を一休、いや、二人？に向けると、揃つてこちらにお辞儀してくれる。

私もお辞儀を返したかったけれど、それは叶わない。

なぜつてそれは、野獸が相変わらず私の腰を支えて……というか、抱えているからだ。

どうやらまだ力が抜けていると思われているらしい。

けれど意外なほど心地よい支えだった。

ふさふさの毛並みもさることながら、なんというか、一つ一つの行為がスマートなのだ。

野獸つてもつと荒々しいものだと思つてたんだけど、彼は違うみたい。

第一、彼は私を食べないと言つた。

しかも。

「「こ」がそなたの部屋だ」

通されたのは我が家がまる「こ」と入りそうな大きな部屋で、窓際には天蓋付きのふわふわなベッド。

サイズは多分クイーン?

一人で寝るならどれだけ暴れても大丈夫そうだ。

背丈より大きな窓にはひらひらの桃色カーテン。

クローゼットはウォークインで、多分実家の部屋より広い。

用意された服は全て高級な生地で作られた、仕立てのいいドレスばかり。

えっと。

これを普段着に使え、と?

思わず野獣を見ると満足げに頷かれた。

シシリエンヌも目を輝かせている。

人形だけどちゃんと表情も変わるし、まるで生きているみたい。

「あの…私、本当にこの部屋を使っていいんですか?」

「なぜだ?」

深い碧眼が穏やかに問いかける。

「私は父の代わりでしうつ? 囚われの身なのに、こんなに至れり尽くせりなんて」

信じられない。

言外に告げて部屋を見回した。

けれど野獣は

「そなたにとつてはこの城が檻のようなものだらう。それで十分だ。私はそなたを捕らえたが、傷付けるためでも辱めるためでも、ましてや喰らうためでもない。できる限り快適に過ごせるよう配慮するつもりだ。ここでの生活は保障するし、安心していい」

「ことのほか穏やかな口調でそう言つた。

騙されているのとは違う。

城に閉じ込められるなら、牢は必要ないってこと?。

それにしてもこんな立派な部屋を充てがうなんて、一体どうして?

疑問符ばかりが浮かぶ。

それに明るい場所に出でようやく分かつたことがある。

ライオンのようなたてがみは夕陽のような黄金色をしていて、きれいに手入れされていた。

身につけているのは、大きな体格に合わせて作られた特大の貴族衣装。

絹糸で織られた光沢のある紺色のジャケットに白いズボン。

ふさふさのしつぽもたてがみと同じ色をして優雅に揺れている。服から出ている手足は確かに獣のものだけど、爪もしつかり磨かれ、研がれているし、汚れは一切付着していない。

清潔さの代名詞「石鹼の香り」がただよう野獣なんて、誰が想像しちだらう。

その野獣がひょいと私の顔を覗き込んできた。

「食事は揃つて食堂で食べることになっている。もうすぐ用意ができるはずだ。破けた服を着替えてくるといい。ただし疲れた顔をしている、コルセットのきついドレスよりゆつたりとしたものを着た方が良さそうだ」

「…はい」

予想外の心配りまで見せられて、私は素直に頷いた。

小さいといつてもシシリエンヌの身長は一メートルくらいある。人形にしては大きな方かもしれない。

おかげで彼女は軽快な動きでクローゼットから、適当なドレスを見繕つて持つってくれた。

ついでに椅子に乗りながら着替えを手伝ってくれようとしたのだけど、いつも自分で全てやつていて私はそれを丁重にお断りした。シシリエンヌは働き者だ。

一つやることがなくなつてもすぐに次の仕事を見つける。

私が脱いだ破れた服を、あつという間にどこかへ运び、支度の整つた私を食堂へ案内するためにすぐ戻つてくれた。

「リリー様、こちらへどうぞ」

想像していたよりも落ち着いた声で促される。

やつぱり疑問だ。

人形に声帯なんてあるのかな。
どこから声がでるんだろう。

ビスクドールのはずなのに表情が変わつたりするし。

なんて脱線した疑問が頭をぐるぐるするけれど、シリエンヌが丁寧に手で促してくれたから、従つて部屋を出ることにした。

あれ？

廊下に出た途端僅かな違和感を覚える。

その正体はすぐに判明した。

明かりだ。

野獣…さん、に、案内された時は今のは半分ほどの明かりだつた。
今は鉛色の鎧が勢ぞろいして壁に飾られていても、最初ほどの不
気味さはない。

天井の悪魔はやつぱり好きになれないけれど。

よく見れば足元に敷かれた赤い絨毯は、毛玉一つないくらいきれ
いに掃除されている。

壁も蜘蛛の巣なんてないし、塵一つない。

歩幅の小さなシリエンヌが滑るように廊下を歩いても埃が立た
ないのは、毎日細かい所までしつかり掃除されているからだらう。
内装は悪趣味だけど、キレイ好きつてことかしら。
でも、誰が掃除してるの？

シリエンヌたち？それとも、まさか…。

「どうした？」

「ひつ…？」

野獣さん…？

突然大きなライオンの顔が現れたりするから、反射的に後ずさつて悲鳴を上げそうになつた。

直後に見えたのは若干耳がしゅんと垂れた野獣さん。あ。

「あの、『めんなさい。びっくりしちゃつて』

「…いい。誰でもこの顔を見れば驚くだひつ」

案の定な誤解をしてる野獣さん。

もちろん顔を見てびっくりしちゃつたのは本当なんだけど、獣の顔に驚いたんじゃないの。

「顔に驚いたのではなく、突然現れたから驚いてしまつたんです」

きつちり訂正して彼の顔を覗き込む。

ぐるりとした碧眼は複雑そうな色を見せた。

納得しかねる、つて顔ね。

けれど野獣さんは深く追求せず、食堂の椅子を引いて私を座らせてくれた。

少なからず傷ついているのに、責めることも叱ることもなくエスポートするなんて。

とつてもジョントルマン。

普通に考えたら自分を捕らえた人喰い野獣と食事だなんて、泣いて悲鳴を上げながら怯えて震え上がつてもおかしくない状況。

でも不思議。

ちつとも怖くないの。

おかげでどのくらいの広さなのか比較対象も見つからないような食堂を見回す余裕まである。

天井から吊るされているのは四方八方に光を反射させる豪奢な三段シャンデリア。

壁に描かれているのはやつぱり悪魔なんだけど、彼らが戯れるのは色鮮やかな春の景色で。

窓枠や柱は金で塗られている。

サテンで作られたカーテンはしつとりした光沢を放ち、ロイヤル

ブルーが心を落ち着かせてくれる。

あれつて本当にサテン？

もしかしたらもつと高級な生地かもしね。

食堂の中央に置かれたテーブルはよく磨き上げられて、どこもかしこも輝いている。

アンティーク調の重みある茶色の椅子もテーブルと同じ素材だ。背もたれを大きく作り、よりかかる場所にはふわふわのクッションまで置かれている。

いつの間にか用意されていたカトラリーは、全て本物の銀食器。持ち手にはすべて細かな彫刻が施されている。

縁取りに使われているのはこれまた本物の金だ。

これ、やっぱり夢？

現実だなんてとてもじやないけど信じられない。

けれど

「どうした？」

野獸さんの声はちゃんと耳に届いてるし、その感覚もリアルだ。なぜかおでこに手を当てられてるけど、肉球の柔らかさが心地いい。

両肩に手を置かれて少しだけグラグラ揺らされてるけど、なんだかそれも心地いい。

つて、やっぱこれって夢？

「現実だ」

あー、そうか。

現実ね。

つて…！

「…？」

慌てて遠ざかっていた意識を覚醒させる。

おでこにはまだ野獸さんのふくふく肉球が当たつていて、穏やかな碧い瞳が私の視線を捉えている。

なんだかバツの悪そうな顔をしている。

まるでイタズラしたのがバレて怒られた小さな男の子みたいな顔。どうしてあなたがそんな顔してるの？

あんな手紙をよこした悪党なんじやないの？

…変な人。

「その、すまない」

「？」

「現実逃避したくなるほど辛い思いをさせているのはよく解つているし、申し訳ないと思つていろ。だが、こうする他なかつたのだ。この姿に驚き、恐怖心を抱くのも…当然だ。だが、せめて食事はしつかり摑つて欲しい。そうでなければそなたが体を壊してしまつ「苦しそうに歪められた表情は、切実さを前面に出して、懇願しているみたい。

だから、どうしてあなたが私を心配しているの？
父の代わりに私を捉えたのは、他でもないあなたなの。」
でも。

「どうしてもともに食事するのが無理だといつなら私が席を外そう。
どうか食事を楽しんでくれ

辛そうに提案する彼の言葉に頷くことは出来なかつた。

続く

困った。

何本もあるカトラリーは、一体どれを使えばいいのかわからない。家ではナイフもフォークもスプーンも、いつも一本だけだったもの。

首をかしげながらそっと野獸さんを見る。

マネをすればいいかと思つて視線を向けたのだけれど、彼は既に一本ずつを手にとつて食べ始めようとしていた。

あら。

タイミングが遅かつたらしい。

けれど結果オーライ。

野獸さんが私の視線に気づいてくれた。

「こういう夕食は初めてか？」

「はい。お恥ずかしながら

「そうか。気にすることはない。外側から使うのだ」

なるほど、外側からね。

高価なナイフとフォークを手にする。

器用に一欠片を口に運ぶと、その美味しさに頬が緩んだ。

「上手だ」

「ちょっとぶつきらぼうなほめ方だけれど、何だか嬉しくなる。

「ありがとうございます」

笑顔と一緒にそう言えば、野獸さんは手にしていたフォークを落

として慌てた。

どうしたのかしら。

あらあらと思つたけど、すぐに気を取り直した野獸さんは、さつきより少し速いスピードで料理を平らげていた。

一方の私は彼に比べて一口が小さいせいか、倍近い時間をかけて食べ終える。

するとすぐに次の料理が運ばれてきた。

初めて田にする大きさのステーキ。

肉厚でワイン色の肉汁がじわりと浮かんでいる。

立ち上る湯気は香ばしい。

臭みを消すための香草もハーブの優しい香りがする。

一口大のステーキを口に入れるとあつといつ間に田みが広がって、

噛めば噛むほど美味しさが広がる。

「美味しい」

無意識に言葉にすると、向かい側の野獣さんはほわりと表情を崩した。

「気に入つたか？」

「はい」

素直な返答に彼は満足げに田を細める。

そして彼も一口、洗練された仕草でステーキを口へ運ぶ。なぜかそれを田で追つて、反応を待つてしまつ。

思つたとおり彼も味に満足したのだろう、頬を緩めていた。良かつた。

そうひとりごちて、ハツとする。

良かつた…？

どうしてだろ？、胸の中が温かい。

変なのは私の方だ。

いくら想像と違つているからつて、相手は野獣さん。

私を食べないとは言つたけど、捕まえたのは間違いなく田の前の人。

人？

既にそんな感覚で彼を見ていたことに気づかれる。

私、彼を人として見ていてる？

目の前にいる、誰がどう見ても獣の、彼を…？

「どうした？ 具合でも悪くなつたか？」

問いかける口調は穏やかだし、内容は私を気遣うものだし。

確か街の噂で聞いた野獣は、いつでも鋭い牙を剥き出しにして研ぎ澄された爪を振り回し、凶暴な手足で捕らえた獲物を引き裂き、血が飛び散るのも構わず、というよりむしろ血肉を喜んで食り食つて…鬼か悪魔かはたまた魔王か、つてくらい恐ろしい存在だった。とても「人」だなんて形容できない。

そもそもあんな大きな手で器用にカトラリーを扱つたり、新鮮だとわかる野菜がふんだんに使われた前菜を美味しそうに平らげたり、ぶつくりした肉球で優しくおでこに触れたり、何度も脳内にトリップする私を気遣つたり、本当に野獣ならそんなことするかしら。

私はしげしげと野獣さんを見つめる。

丸くて温かな碧眼は戸惑うようにこちらを見つめ返す。
そうよ。

本当に野獣ならこんな血の通つた優しい目をする？

人の体調や精神状態を気遣つたりする？

自分が優位に立つてていることは十分に分かつているだろうに、あまつさえ捉えた人間の食事を優先して自分は席を外すなんて言い出したりする？

答えは全て、ノーだわ。

彼が本当に野獣なら数々の振る舞いをするわけがないもの。

…かといって、着ぐるみにも見えないのよね。

体を支えてもらつていたからよく分かる。

彼の体温は本物だ。

「あの」

「何だ？」

野獣さんは突然口を開いた私に困惑しながら返事をする。
ほらね、こんな反応は高い知能を持った人がすることよ。
本能のままに人を喰らう野獣のそれではないわ。

「あなた、本当に…本当に野獣さんですか？」

田の前の可憐な唇はそう告げた。

は？

私の顔はさぞ情けないものだつたろう。

あまりに脈略のない問いかけに一瞬言葉を失つ。

なぜかこの娘は時折考えに耽る事があり、無言でぐるぐる表情を
変えるところがある。

最初は私の姿と自分が置かれた状況に悲嘆し、恐れ、怯えている
せいかと思つたが、私が席をはずすと提案したのをきつぱり断つ
てから、どうやら怖がつて現実逃避しているのではないかとわかつた。
食事が運ばれれば嬉しそうに頬を綻ばせて料理を口にしているし、
緊張している様子も見られない。

少しの間和やかな時間が過ぎていたのだが、彼女は再び突然思案
顔をした。

そして、なぜかじつといつちを見ていると思つたら、先の問い合わせを口にしたのだ。

何がどうなつてあんな質問が飛び出したのか分からぬ。

分からぬが…ここまで冷静に接してくる人間は初めてだつた。

あの父親も肝が据わつていたが、さすがその娘だ。

地下牢では父親を心配する思いもあつてか、突然の出来事に慌て
たり怯えたりする様子を見せたが、これまでの短い時間で私を観察
していたのかもしれない。

本当に野獣か、などと聞かれたのは初めてだ。

「…見ての通りだが

内心湧き上がる嬉しさをひた隠したせいで、やたら威圧感のある

考え方になつてしまつ。

けれど娘は少しも変わることなくこちらを見つめている。

そして突然立ち上ると、私の背後に回つた。

手には何も持っていない。

とはいえたが、彼女は警戒した。のだが。

ふわり

小さな手が首筋に触れる。

それからペタペタと、たてがみを撫でるかのように手を動かし

「やつぱり

小さく呟いた。

「やつぱり、とは？」

問えば彼女は再び自席に戻り、複雑な笑みを浮かべる。

「もしかしたら着ぐるみかも、って思ったけどやつぱり違った。その姿は本物ね」

ああ、その「やつぱり」だったのか。

納得したが、直後、彼女は丸い栗色の瞳をまっすぐこちらに向けた。

まだ疑問があるのだろうか。

視線で次の言葉を促すと、彼女は小さく微笑む。

それは私の心臓をどくんと動かすには十分すぎる魅力を放つていた。

なんとか動揺を押し隠すが、この体格では鼓動まで伝わってしまった。

しかし

「あなたの名前を教えてください」

慌てる私の様子などおかまいなしに彼女はそう言った。

名前？

「お互い呼び合つ名前は必要でしょ？ いつまでもあなたを野獣さんって呼ぶのは失礼だもの」

「ではそなたの名前も教えてくれるのか？」

「もちろん。あ、そうよね、名前を聞くならこちらから名乗るのが礼儀ね」

いや、こんな私に名前を教えてくれるのか、という意味で問い合わせ

したのだが、彼女は別の解釈をして納得していた。
そしてさつと華奢な手を差し出す。

これは？

戸惑っていると、彼女はその手で私の手を優しく握る。

握手の意味だったのかと、鈍った頭はのろのろと反応する。

彼女の行動を先読みしてリードしなければ、と想い心と反対に体は鈍りきっていた。

華々しい社交界で姫君たちを相手に、夜毎ダンスをしていたのはもう数百年も昔のことだ。

心は覚えていても、脳はそれらを少しづつ忘れてしまったのかもしない。

なんとも言えない虚無感と苛立ちが心に巢食つ。
けれどそれは一瞬で吹き飛んだ。

「私はリリー。あなたのお名前は？」

「…ラピス…ラピス・ランフォードだ」

「やつ。ラピスをさつておっしゃるのね。どうぞよろしく」

「あ、ああ」

彼女の笑顔は、穏やかに輝く月のようだった。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7174z/>

My Sweet Beast

2011年12月25日15時53分発行